

8年ぶりに開催された国際農業機械展は7月10～14日の日程で、国内のみならず、海外からの出展者の参加もあり、これからの十勝に活気と繁栄をもたらすことになった。

初めてこの国際農業機械展に行ったのは1970年（昭和45年）のことと、自分でも信じられないくらい可愛いかった中学1年生の時だった。朝4時くらいに新車のカローラ・バンに家族4人が乗り、東海林新聞店で今はなき北海タイムスを配達前に受け取り、今では高速で2時間、下の道路を通っても3時間で行ける距離を、当時はかなり遠回りの富良野経由で4時間以上かけて、西帯広工業団地の会場に向かった。

会場に着くと、入口で十勝の恵みをふんだんに味わうことができる「よっぱ牛乳」を無料提供していた。子供心に牛乳なんてどこのも同じだろうと思っていたが、全く違っていた。長沼の学校給食で提供されていた、今では存在しない「ホロムイ牛乳」は水で薄めたのかと思っただけで、もう一個おねだりした。

会場を中に進むと、確かMFのフロントローダー付きトラクターが一番下に3台置かれ、ローダーを利用してその上に2台、一番上には小さなトラクターを1台使い、ピラミッドのアートを作っていたのだ。

会場では当時TVの人気番組ダイビング・クイズをバクリ、クイズが回答されないと回答者に乗せた滑り台が上がるゲームがあり、中学1年生の私も参加した。

質問は今でも覚えている。無風状態で東京タワーから落とされたボールは西に落ちるか、東に落ちるか。数秒考え「西」と答えた。質問者がどうしてそう答えたのか聞いたので、13

歳にして天才的な頭脳を持ち合わせていた私は「地球は左から右（東）に回転するから、ボールは反対の西にずれて落ちる」と説明したところ、会場からは天童現れる！くらいのドヨメキが起こった。

そこまでは良かったのだが……、次の問題「黒いダイヤは石炭、では赤いダイヤは？」には答えられなかった。

理由は簡単だ。小豆をまだ栽培していないので知らなかったのだ。生産者がほとんどの会場からは「えっ？」の音が発せられた。質問者は私にどこの中学生か聞いてき

上から目線で飛ぶという約束は守りました

Vol.78



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

た。私は「中中」と答えた。「どこの町？」に、私が「長沼」と答えた時の、だよな顔は今でも覚えている。

半年もかけて タライ回し

では私も関わった今回の国際農業機械展について総括してみよう。

結果として8年前よりも入場者や盛り上がりは良くなかったと聞くし、この開催者たちもそのことを認識

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

しているようだ。北海道の農業には農政とそれに伴う予算配分とバイオ振興は重要なことである。

で、この私は、とあるバイオ振興の組織に加盟している。構成はホクレン農業総合研究所、北海道電力、雪印種苗、酪農学園、北洋銀行など北海道の名だたる会社を会員にするなか、私のような農業者が参加する**明日の北海道のバイオを飛躍させるべく活動する団体**である。

本年1月6日に勉強会があり、今年の活動をどのように盛り上げるのか検討した。その時に私が「今年の7月に帯広で大きな農業関係の催し物があります」と口を滑らしてしまった。「じゃー、そこで勉強会をやるよ」ということになり、調整役として、言いだしつべの私が関係各所と調整することになった。

1週間くらいして国際農業農機展の開催委員会の事務局に電話で開催期間中のブースの貸し出しについて問い合わせた。電話の相手は「はあ? え? ほー」と日本語を聞く態度ではなかった。貸出ブースの割り振りは終了したので、同じ会場のイベント・テントで行なわれる「フードパレーとかち食彩祭」の事務局が帯広市役所にあるから連絡してくれとなった。この瞬間、**間違はなくライ回しになる予感がした。**

とりあえず、指示された帯広市商工観光部観光課観光振興係に電話をしたところ「フードパレーとかち食彩祭」の立ち上げがまだで、4月の人事で担当が変わるのでホームページからメールを入れてくれたら引き継ぎをされると言われた。勉強会開催についての問い合わせには、すぐ返信メールが届き、4月に再度電話連絡をすることになった。

4月になり帯広市役所のアスケさんに電話をしたが、5月の連休明けに電話連絡をいただけることになった。ところが、連休が終わり5月10日を過ぎても連絡がないので、再度こちらから同15日に帯広市役所のアスケさんに電話をした。彼は「もう少し待ってください」と言うので5月下旬まで待った後、再々度のやり取りでこう言った。「事務局が帯広市役所から帯広市東1条南8丁目2にあると十勝毎日新聞社事務局に移った」と。その時、私は心のメモリーの単語集から「やる気だな、こいつら」という言葉を選んだ。

6月2日に指示された十勝毎日新聞社にメールを入れ、担当者のオヌマさんと話をして携帯番号のやり取りを行ない、同4日のメールで「了解いたしました。遅くとも明日には回答いたします」と返事をいただいた。ところが2日待っても返事が来

ない。同10日にメールを送ると、返事が来て「週末まで決まりません。よろしく願います」だって。でも週末にも連絡なし。

その後数日して、オヌマさんから電話があり、「勉強会はできません」と言われたのだ。「なぜですか?」と聞いたところ、「スケジュールがいつばいなので無理です」と答えた。私はおかしいと主張した。1月からやり取りをしているのに何か重要な行事でも入ったのか?と聞いたところ、オヌマさんは「.;.;.;.*wp」となった。

こちらも冷静に話をしながら海外からも大学の先生を呼んでいるのに旅費はどうなるのか聞いてみたが、やはり明確な回答はいただけなかった。**事実を確かめろ**ということになり、わが農場の従業員が空いていないと言っていた7月14日に会場に陣取り状況報告してもらった。**やっぱり話と違うじゃないの?**この日は朝10時から13時半までしっかりと空いていたし、イベントカレンダーもそうなっている。

なんだな、ユーガイズ(帯広市役所アスケ氏、十勝毎日新聞社オヌマ氏)は普通のウソつきか、やる気がないか、やる能力がないのか、上司からドタキャンの指示を得たのか。どちらにしても、苦勞して働いてい

る姿を家族に見せるがいいだろう。今回は個人の資格で申し込んだのではない。しっかりした組織の名前を使わせていただき、その許可を得た。がっかりしてそのバイオ組織の理事に連絡すると「そうか、プランBだな」の隠し玉を持っていたのだ。まっ、こんな私に全権を任せると言っても限度はあるよな。

結局、勉強会は帯広の大学で開催された。学生・研究者・生産者・海外の大学教授がなぜフィリピンでは一昨年からコーンの輸入国だったのに、昨年からは輸出国になったのか、エッグプラント(なす系)に子供が1日おきに計80回以上も殺虫剤散布を格段に減らす技術は、消費者だけの問題ではなく、生産者や国の未来を変えることになるなどとも勉強になったのに、あいつらのしたこと……。アスケ氏とオヌマ氏は十勝のバイオの将来だけではなく、未来ある生産者を愚弄したことになるのだ。せいぜい4年後はもっと上手なウソをついてください。

という訳で会場の土を踏むことはなかったが、**会場上空を3秒間、上から目線で飛ぶという約束は守りました。**

帯広市長さん、十勝毎日新聞社の社長さんにはこのページに付箋を付けて郵送させていただきます。